ゆうことみゆきの

なるほどアイヌ文化トーク
ソンコ de ソンコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子（札幌大学副学長）と
村木美幸（アイヌ民族博物館専務理事）が、
その魅力をソンコ（＝お便り）形式で語り合います。

今月のテーマ　**イラマンテ（狩猟）**

イラスト／安田千夏

この時期、山はすっぽりと雪に覆われ、キムンカムイ（クマ神）も冬眠中。かつてのアイヌの人たちも囲炉裏で暖をとりながらひたすら春を待ちこがれ…って思いがちだよね。とんでもない。アクティブな狩人たちは、厳寒の野山を雄々しく駆け回っていたのでした。そもそも、かんじきさえ履けば、枝葉が茂る夏よりも冬の方がはるかに歩きやすかったとのこと。生きる知恵と力量を備えたアイヌの人たちにとって、冬山での野営も恐るるに足らず。かっこいいよね。

ところで、クマの神様は夏よりも冬の方がはるかに多くの恵みをもたらしてくれたんですって。毛がびっしり生えてる冬の毛皮の方が上質。なにも食べていないから胆汁がたくさん分泌され、熊の胆（い）も大きくて最高。え？熊の胆、知らない？熊の胆のうのこと。アイヌ社会での利用はもちろん、古くから交易品として珍重された高価なお薬です。二風谷（にぶたに）に住んでいた頃、急にお腹が痛くなった私に、萱野（かやの）先生が「ほれ、飲んでみなさい」って小さな黒い粒をくださったの。「苦いから一気に飲み込むんだよ」と言われたのに一瞬口の中に触れ、もう苦いのなんの！でも、本当にすぐにお腹の痛みは消えました。それにしても、スッと熊の胆が出てくるところに、狩猟文化の伝統を感じたものでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

山でも海でも狩猟することをイラマンテといいますが、これから春に向けてはやっぱりクマやシカの猟が多かったみたいですね。冬山でも猟の仕度は身軽なのが基本。携行食や弓矢などの猟具類、発火具の他はマキリ（小刀）とタシロ（山刀）があれば必要なものを殆ど現地調達できたとのこと。松の枝葉でつくる野営用のフップチャチセもタシロ一丁あれば大丈夫。円錐状に立てた骨組みに松の枝先を地面に向けて立て掛けるだけ。遠目にはとんがり帽子のような松の固まりにしか見えませんが、五、六人も泊まれる大きなものもつくったんだって。寝床も松の枝葉を重ねて火を焚き、熾（お）きができたらその上に松葉を何枚も何枚も重ねることで、熾きの温もりが伝わって暖かいんだって。まさに床暖房だよね。男たちはフップチャチセで猟具を入念に手入れして翌日の猟に備えたってわけですね。

罠を使った猟も多く、弓矢を固定してクマやキツネなどを獲るアマッポ、毛皮を傷付けないように弓にヘラ状の板を仕掛けて挟んだり、石の錘（おもり）を載せた簀子（すのこ）状の枠を落としてテンやタヌキなどを圧死させるアクペ、他にもウサギ罠やカケス罠などいろんな猟がおこなわれたの。どれも動物の生態を熟知していないとできない猟だよね。

■本田優子（ほんだゆうこ）：金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸（むらきみゆき）：白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏（やすだちか）：神戸市生まれ。日本口承文芸学会会員。趣味が高じて本連載の挿絵を担当。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。